

Title	変身の文化
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 3 p.93-p.101
Issue Date	1990-09-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79496">https://hdl.handle.net/11094/79496</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 変身の文化

井本 英一

ヤマトタケルノミコトは天皇の命をうけて熊曾建<sup>くまそたける</sup>を征伐に行く。そのとき、ヤマトタケルは、叔母のヤマトヒメノミコトから衣裳をもらい、剣を懐に入れて出かけた。熊曾建の家につくと、ちょうど家を建てていて、落成のお祝いをしようと騒いでいた。ヤマトタケルは、叔母の衣裳を着て女装し、家の中に入って女たちに混じって坐っていた。建兄弟はこの美しい乙女を見て、自分たちの間に坐らせて酒宴を張った。酒宴が酣<sup>たけなわ</sup>になったとき、ヤマトタケルは、熊曾の兄の衣の襟をつかんで胸を突き刺して殺した。弟は逃げたが、追いかけて背中をつかんで剣を尻から刺し通した。この話は、『古事記』と『日本書紀』に多少の異形をともなっている。男が女装して敵を殺すのは、ある種の騙しと考えられていたことも確実である。

ところが、スサノオノミコトの八岐大蛇退治の話では、ミコトはクシナダヒメを櫛に変え、角髪<sup>みづら</sup>に刺して、大蛇が酒に酔ったところを切り殺した。そのとき、大蛇の尾から草薙剣<sup>くさなぎのつるぎ</sup>を手に入れた。この話では、スサノオは女装して大蛇を騙したとはいっていないが、女を櫛に化けさせて、それを身につけたのは、女装と同じだということができる。豊臣時代の豪傑、岩見重太郎は、父の仇討ちを天ノ橋立でするまでに、講談によると、人身御供にされる娘の身代わりになって女装し、ヒビを退治した。ここにも騙しのモチーフはない。『太平記』や『平家物語』にある渡辺綱の話では、綱が女装して妖怪を待っていると、虚空から綱の髪の毛をつかむものがあって、その腕を切り落とし、源頼光に献じた。妖怪が頼光の母に化けて腕をとり戻しにきたが、頼光のために退治された。ここでも騙しのモチーフはない。ある種の呪術的な用意をしたと思われる。渡辺綱は戻り橋の上で妖怪の腕を切るが、橋上での女装といえば、五條大橋での女装した牛若丸と弁慶との話がある。女装が境界である橋の上で行なわれ、そこで闘争がなされることに、これらの話の共通点がある。しかも、女装した男性が勝つ。

神武天皇の伝説に出てくる兄猾<sup>ようかし</sup>・弟猾<sup>おとうかし</sup>のうち、兄の兄猾は天皇を騙して殺そうとするが、それを見破られて、自分のつくったわなに追い込まれて殺される。弟猾は帰順するが、天皇が夢で見た天香山<sup>あまのかぐやま</sup>の土を採りにゆくために老父の姿に変身したシイネツヒコと共に、老女に変身して山に向かう。賊軍は道を開けて二人を通した。その土で天皇は瓦を焼き、それを祭って賊を平げることができた（「神武紀」）。ここでは、女装した弟猾と賊との戦いはないが、橋に相当する開けた道がある。騙しのモチーフは兄猾の話となっている。

神功皇后の新羅遠征では、皇后は男装した。皇后は遠征の前に群臣を前にして「うけい」をし、

自分は婦女である上に不肖であるが、男装して攻略すれば神々の助力で成功するだろうといった（「神功皇后紀」攝政前紀）。出征にあたって女性が男装するのは、ある意味では敵方に怖れを生ぜしめるので騙しのモチーフであるといえないこともない。『日本書紀』には、そのような意味の皇后のことは記録されている。神功皇后が男装して乗船し、船のへさきに立って敵を威圧するのはよく分かるが、祭事で、男が女装してへさきに立つのをどう解釈したらよいのであろうか。国分直一「船と航海と信仰」（『えとのす』19号、1982年）によると、海村の神事に際しての船競べに、へさきに立って船人を鼓舞する役は、女装の男性であることが普通である。瀬戸内海の祝島の八幡宮の神事における船競べに登場した女装の美青年は、自分は男であるが女としてへさきに立つのだといった。女装することによって、双性の神人となる。つまり、男性にして女性の性を兼ね持ちうるならば、超強力な神人となるのであった（37頁）。ここでは、男装・女装のイデオロギーが両性具有にあることを論じている。この考え方の方が、へさきに立つ変性男子あるいは変性女子をよく説明するようである。このような転性が境界で生じているのが特徴の一つである。

女装する男のモチーフは広く見られる。ヘロドトス『歴史』によると、ダリウス大王がマケドニアのアミュントスに使節を遣わしたとき、使節たちは宴会に女を侍らすことを要求した。そこで、アミュントスの子アレクサンドロス（アレクサンダー大王とは別人）は、まだひげの生えぬ青年に女装させて使節らに侍らせ、彼らを刺殺した。『プルタルク英雄伝』によると、ペロピダスの仲間であるカロンとメロンは、鎧の上に女の衣服を重ね、モミと松の葉のたくさんついた冠を被ってその陰で顔を隠すようにして、敵であるアルキアスとフィリップスの宴会の場所へ向かった。女が来たというので、宴会に迎え入れられたが、カロンとメロンは、食事の間を縫ってアルキアスとフィリップスに迫り、刀で刺殺した（「ペロピダス」11）。ここでは、女装した男は、頭に青葉のついた冠を被っているの、女性への変身がある種の呪術的なものであったらしいことが分かる。冠は、単なる騙しのために顔を隠したのではなさそうである。

イランのササン朝の始祖伝説によると、アルダクシールは多くの金貨と銀貨と衣裳をたずさえ、自分はホラサン人に変装して竜に仕え、食事のときに熔銅を吞ませて竜退治をした（伊藤義教『古代ペルシア』岩波書店、1974年、316頁以下、パハラヴィー語書『バーバグの子アルダクシールの行伝』から）。ここでは、王権獲得のための変装のモチーフが見られるが、女装のそれではない。しかし、ササン朝のホルモズド4世の將軍であったバフラーム・チュービーナは、一時的にササン朝王権の篡奪者となるが、女装と深く関わっている。11世紀のイランの叙事詩『王書』によると、バフラームはホルムズド王に辱められて女の衣裳と糸巻き棒を贈られる。バフラームは女装して自軍の將軍たちの前に現れる。そのときは自重するが、やがて運命によって彼は王座に坐ることとなる。（C1844以下）。チュービーナというのは、女性が頭部に巻いた赤いスカーフのことで、別に鶴の意味もある。ツルのいくつかの種類は、タンチョウをはじめとして、頭頂や頭部が赤い。バフラームはいつも女装していたわけではないが、このようなあだ名をつけられ

たのであった。イランでは、王権交替のときに、このように女装のモチーフが現れるが、かなり文芸化した形で残っているため、はっきりしないところがある。

ヘロドトス『歴史』1・107以下に伝えられるキュロス大王の出生譚と似た話が仏典の中にも見られる。律部の『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第18から19にかけてその話が出てくる。それによると、王妃の生む男児が王を殺害するという占い師のことばがあったが、王妃は男児を出産した。そこで妃は、同じときに女兒を出産した漁師の妻と赤ん坊を交換した。しかし、男児はおおきくなって王に追われて逃亡するが、ついに谷底に身を投げる。仙人がこの男児を美女に変えたところ、王宮に迎え入れられて王に仕えるようになった。王との合歓のあと女身を変じて丈夫となり王冠を戴いて王となった。このように、王の交替に際しても男女の変換が行なわれた。

古代オリエントのセミラミス女王の伝説によると、彼女はもと、オンネスというシリアの総督の妻であったが、オンネスがバクトラを包囲したとき、妻を呼び寄せると、彼女は男女の別の分からない服装で現れ、戦いの先頭に立ってバクトラを陥落させた（小川英雄「セミラミス伝説におけるアナトリア的要素」『深井晋司博士追悼 シルクロード美術論集』吉川弘文館、昭和62年、85頁）。セミラミスが軍の先頭に立ったという伝説は、新羅花郎を想起させる。『三国史記』新羅本紀第四眞興王37年条に、南毛と俊貞という二人の美女を選んで源花としたが、俊貞が南毛を嫉妬して殺し、自分も死刑に処せられたので、そのごは外貌秀麗な男子を選んで花郎としたところ、仲間が雲のように集まってきたとある。この記事から、新羅では、男性花郎が成立する以前に、女性花郎があったことが分かる（三品彰英論文集第6巻『新羅花郎の研究』平凡社、昭和49年、109頁他）。新羅にも、女性が軍の先頭に立つ習慣があったと考えてもよさそうである。中国にも同じような習慣があった。『自然と文化』日本ナショナルトラスト、1986年、特集『眼の力』所収の白川静「眼—この神を視るもの」によると、殷の武丁が北方族である若方を遠征したとき、眉に呪飾を施した巫女である媚人三千人に若方を望ましめたという。また、殷の氏族軍の先頭には婦姘ふけいと呼ばれる婦人が立ってこれを率いた（白川『中国古代の文化』講談社、昭和54年、第8章）。このような現象を見ると、神功皇后、セミラミス、源花・花郎などとともに、軍の先頭に立つ性には、ある種の呪的なものがあったことが分かる。必要に応じて男装したり女装したりしたのであろうが、不安定なゆれがある。各地に伝わるアマゾンや女軍の伝説も、このような伝承の異体と考えられる。平家の公達が薄化粧しておはぐろを施していたのも女装の一変種と考えられる。『アラビアンナイト』の「バスラのハサン」では、女人国ワクワク島を訪れた男性のハサンは、女性戦士に変身させられて、女子軍に入れられた。唐代の年中行事に、正月15日の夜に行なわれた元宵観燈があった。長安・洛陽・揚州などでは、樹木に多くの燈籠を懸けて万燈とし、たがいに巧を争った。人々は獸面を戴き、男子は女装して練り歩き、物真似、輕業など、詭状異形百出の態を共に観る俗があった（石田幹之助『増訂 長安の春』平凡社、昭和42年、66—7頁）。前掲書によるとこの風俗はイラン起源であるという。このような変身行列は古代イランの新年行事にも見られた（G・ウィデングレン『イランの宗教』シトゥットガルト、1965年、48—

9頁)。男女の性転換は、年の変わり目に見られることが分かる。のちに、シーア派イスラム教徒の行事になったモハッラム月10日（1月10日）のイマーム・ホセイン追悼行列でも女装のモチーフがある。この行列はホセインの葬列が先を行くが、うしろはホセインの一族の婚礼の列が続く。一人の男が、頭上にカセムの婚礼の室と称する小さな部屋をかついでいて、その中に女装した男の子が入っている（H・マセ『ペルシア人の信仰と習俗』パリ、1938年、127頁）。そのほか、この行列では女装が見られた。1811年、英人J・モーリアがイスパハンで見たモハッラムの行事の記録が残っているが、この中で、役者の一部が女装し、悲歌をうたった（『第2回ベルシア・アルメニア・小アジア旅行』ロンドン、1818年、179頁）。ローマで行なわれたイシス女神の祭礼での仮装行列は、中国の元宵の行列と似ていた。行列では、ある者は兵士のまねをし、ある者は狩人に変装し、ある者は喜劇役者の短靴を穿き、頭に義毛をつけて女に化けて歩いた。熊や猿や羽をつけたロバもこの行列に参加していた（アプレイウス作、呉 茂一、国原吉之助訳『黄金のロバ』下巻、岩波文庫、1957年、149頁）。この後、ロバに変えらえたルクウスは、熱烈なイシスへの信仰によって人間の姿に戻ることができた。元宵やモハッラム月10日の女装は再生のためのそれであると考えられるが、イシス行列の女装も再生にかかわるものである。

ギリシア神話のヘラクレスは十功業、あるいは十二功業をたてて不死身を得るが、これらの苦行は動物を退治することから成っていて、最後の功業が、地獄の番犬であるケルベロスを生け捕りにして地上に連れ帰ることであった。それと同時に、ヘラクレスは永生を手に入れることができた。10とか12という数は、古代ギリシア・ローマ時代の1年の月数を指したらしい。この英雄ヘラクレスは神話ではときに女装する。十二功業後の遠征で、ヘラクレスは殺人の贖いのため奴隷とされ、リュディアの女王オムパレーに買われる。このとき、ヘラクレスは女装し、女王は男装して結婚したといわれている。結婚式のとき、男女がそれぞれ反対の性に転換する風習はギリシアに限らず、世界的に見られた。プルタークによると、スパルタでは、結婚のさい、女は頭を剃って男装し、アルゴスでは女はひげをつけて男装したという。中国の苗族の民話「中国の王子とベトナムの姫」によると、中国の王子は女装してベトナムに行き、ベトナムの王女に仕え、あるとき男の姿にもどって求婚する。二人はさまざまな辛酸をなめたあと結婚する（『苗俗民話集』村松一弥編訳、平凡社、昭和49年、90-98頁）。イランの結婚式で、女性から男性に女性の布地を贈り、男性から女性に男性の布地を贈るのは、このような変身の名残である。

ローマの将軍クラッススは、パルチア軍に殺されて、その首と手はアルメニアにいるオロデスのところに送られた。いっぽう、クラッススを生きたまま連れていくという凱行列が行なわれたが、この行列では、クラッススにいちばんよく似た者に王妃の衣裳を着せ、そのうしろには、妓女たちに、クラッススの女々しさを嘲る歌をうたわせて従わせた（『プルターク英雄伝』「クラッスス」32）。この行列は、一種の葬列であるが、そこには女装や実の女性に参加している。死者への嘲笑も再生儀礼の一つであるので、この行列は葬列の一つであったと考えられる。

小アジアの大地母神キュベレの祭りでは、男性の祭司らは自らの男根を切り取って街路を走り

ながら、それを家々の入口に投げ入れた。これらの行事は、キュベレの夫であり子であるアッティスのため、3月24日から3日間行われたが、明らかにアッティス（オシリス・アドニス・キリストと同じ復活する幼童神）の再生のための祭りであった。これらの祭司（ガッロイ）が女装したのが、女神キュベレに同化するためだと考えられていたが、本来は再生のモチーフであった（キュベレの祭司については、小川、前掲論文）。

同じような春祭りであるインドのホーリー祭でも男の女装が見られる。木村重信『ヴィーナス以前』（中公新書、昭和57年）によると、この祭りは火祭りであると同時に、男女の自由な性交渉が行なわれるが、バンガロールで行なわれる年一回の大祭では、主な祭加者は女装しなければならない。このような祭りはもとは女だけで行なわれたが後に男にとって代わられた。さらに、女がそこに入るのが禁じられるようになった（126-7頁、コーサーンビー『古代インドの文化と文明』から）。この祭りでの変装も、春の復活再生と関係することは間違いない。日本の例を一つあげてみよう。隠岐島の<sup>ごかしん</sup>五箇村の<sup>なごうだ</sup>長尾田<sup>もて</sup>百手祭りは4月3日に行う海人族の春祭りであるが、ネズミとカラスを描いた的を射る行事がある。ここでは、最長老の女性が顔に墨でひげを描き、主役を演ずるが、他の女性も顔にひげを描いて男に化ける（『えとのす』16号、村尾秀信「隠岐島五箇村の長尾田百手祭について」）。この祭りで女性が顔に描く文身のような口ひげは、海中で有害魚を威圧するためのものではなく、射的によって神意を問い、生産と豊饒を願うさいの変身であると考えられる。生殖や性交渉とも関係のある変身である。イランでは、新生児に再生衣と呼ばれる衣服を着せる。男児には女の衣服を、女児には男の衣服を着せる。生誕にさいして、このようなあべこべの行為をするのは、悪霊アールを騙すためであると信じられているが（マセ、前掲書、42頁）、比較して考えると、必ずしもそうではなかったことが分かる。同じ習俗が中国にもあり、ここでは、新生の男児を女装させ、女子の名を付けて鬼神をあざむいた（永尾龍造『支那民俗誌』第6巻、国書刊行会、昭和48年、572頁）。因みに、女性の口のまわりを黒く塗る風習は、ギリシア先史時代のミュケナイ文化にも見られ、メロス島のピュラコピ出土の女性像にも見られ、文身とも宗教的化粧とも考えられる（『日本オリエント学会創立30周年記念 オリエント学論集 新井桂子「ミケーネ時代の神殿に関する一考察」）。アイヌ婦人が口の周囲に施した文身は、もとは宗教的な男性化の化粧であったのかも知れない。

ヘロドトスによると、古い種族であるミニュアイ人はスパルタに受け入れられ、土地を与えられたが、やがて増長して王権に参加することまで要求し出したので、スパルタ人は彼らを死刑にすることに決定した。そのとき、ミニュアイ人たちの妻が夫に会わせて欲しいといって牢に入って来て、夫に自分たちの衣服を着せて逃げさせた（4・146）。逃亡のさい、変装するのは極めて自然の感じであるが、その底に何か呪術的なものがあつたのかも知れない。プルターク「ポンペイウス」によると、パルティア王ミトリダテスはローマ兵に敗れて3人になったが、その1人は妾のピュプシクラティアであつた。彼女は男まさりで勇猛なので、王は男性名のピュプシクラテスで彼女を呼んでいた。彼女は男装して馬に乗り、王と共に逃げた。王は彼女に豪華な衣服を

として褒美として与えた(32)。逃走と変身は、変身闘争へと発展していくが、このように単なる性転換に終わる場合も多い。ギリシア神話では、英雄ヘラクレスは、トロイヤからの帰途、コース島に上陸し、牡羊をかけて羊飼いと闘争したが、島民が羊飼いの味方をしたので、女の小屋に逃げ込み、女装して逃れた。変身は、このような危機に際してとった一つの手段であったとも考えられる。しかし、必ずしもそうはいいきれないふしがある。プルターク「カエサル」によると、ローマには夜通し行なう女の祭りがあった。カエサルの妻ポンペイアがこの祭りを催したとき、クロディウスというまだひげの生えていない若者が、琴弾き女の衣装をつけて家に中に入ったが、発覚したので、知り合いの召し使いの女の部屋に隠れたが、それも見つかり、女たちに戸口から追い出された。カエサルは、ただちにポンペイアを離婚した(9-10)。ところが、プルターク「アントニウス」によると、このクロディウスは、ラエリウスという男と二人して売笑婦の衣装をつけてアントニウスのもとに行き、勇気を出すように励ました(18)。この二つの記述から推察すると、クロディウスは、女装する役を担った男性で、一方では、女の祭りの中に女装して入り、故意に見つけられて追われるお祓いの人間としての役割をもっていたように思われる。一方では売笑婦に変身しているが、巫女の姿になってアントニウスに神の語を伝えて励ましたのであろう。クロディウスが女の祭りに潜入するとき、琴弾き女に変身したとあるが、琴弾き女とはまさに神に仕える巫女であった。このアントニウスであるが、カエサルがイスパニアで戦死して、敵軍が押し寄せてくるというデマが流されたとき、アントニウスは奴隷の衣服を着て変装してローマのわが家に到着し、アントニウスが妻に宛てた手紙をもってきたといって妻の部屋に通された。妻が封を切って手紙を読み始めると妻を抱擁してキスした(「アントニウス」10)。この行為は一見、夫の妻に対する愛情の一つの表現の仕方のように思えるが、古い時代の貴人の妻—自分の妻であれ他人のものであれ—に近づくやり方であったとも考えられる。異性に転換したり、奴隷のようないやしい身分の姿に身をやつしたりすることの中に、当時すでに失われかけられていたと思われる神の来訪の姿を見ることができからである。これと反対の立場として、こちらから神を訪ねる場合も祭礼で見られるように転性したのだと思う。狩猟は古くはトーテム獣を殺してその魂を受け入れることによって人はその生命を更新することができた。中世イラン(おそらく古代にも)では、狩猟に出かける女たちは、小姓の服を着るのが習慣であった(ニーザーミー著・岡田恵美子訳『ホスローとシーリーン』平凡社、昭和52年)。この場合は女性だけが男装したようであるが、それは世間の目をはばかる目的ではなかったと思われる。女装した男子が良家の子女に近づく例は中国にもあるが、すでに悪漢の所業とされていた。金閨丈夫『木馬と石牛』(法政大学出版社、1982年)所収の「男子の纏足」に、『聊齋志異』巻13の「人妖」を例にあげている。主人公の王二喜は女装して馬万宝の妻の田氏に近づき、これを犯そうとして謀られ、捕らえられて宮せられた。妾婢のごとくに酷使せられ、かえって天命を全うしたという。中国では女装するには纏足するのを必要とした。古くは中国にも、女装した男が女性に近づく儀礼があったと考えられる。インドの伝奇集『屍鬼二十五話』(上村勝彦訳、平凡社、昭和53年)の第15話

「ムーラデーヴァと性転換の秘薬」にいう。あるバラモンの青年が王女を見初める。青年は思いをとげるために魔法使いのムーラデーヴァにたのむ。彼は青年に丸薬を飲ませて女装させ、王にたのんで王女に仕えさせる。王女もバラモン青年に恋しているのを知って、男の姿にもどり、二人は思いをとげる。青年は昼は女の姿になり、夜は男になって宮中で過した。ところで、この青年が王女を見初めたのは、ホーリー祭の行列祭であったという(145頁)。

舍利弗と天女が問答する有様が『維摩経』第7章「観衆生品」にある。舍利弗は天女に、どうして女の姿を変えないのかと尋ねる。天女は神通力によって舍利弗の姿になり、舍利弗は天女の姿に変わる。それは、二人が男女の本質的特徴について謎問答のようなことをしている最中である。仏は、全てのものは男でもなく女でもないといっている。仏教とは全く関係はないが、フィリピンのビサヤ族の間に、似たような風習がある。三原幸久訳「フィリピン・ビサヤ族の昔話」(『世界口承文芸研究』第2号所収)の第1話「学生ファン」によると、ファンに謎を出された女性は家に帰って男装し、ファンの所へ行ってその答えを聞き、もとの女の姿になってファンの所に行き謎を解いてみせ、二人は仲良くなり結婚する。このように、謎解きをするさいに性転換をするのは、古い時代の宗教的、呪術的行為の名残であったと考えられる。

謎はおそらくは神のことばで、これを読解するためには、現実から逆転した状態でなければならなかった。舍利弗と天女の場合もそうであるが、謎が解明すれば互いにもとの姿にもどるのである。謎は境界における混沌を表わしたものと考えられる。

エスキモーの間では、19世紀の中葉彼らと生活を共にしたC・Fホールによると、新年に際して二人の人が村の家々を訪ねて、火を吹き消してゆき、そのあとで、新しい火種から村中の火をつけかえる。エスキモーはこの火を新しい太陽と呼んでいる。ところで、二人の男のうち一人は女装している(J・Gフレイザー『美男バルドル』第1巻、ロンドン、1913年、134頁)。ヨーロッパでも似たような行事があった。復活祭に入る前のレント(四旬節)の第1日曜日、19世紀の初めごろまでは、女性たちと女装した男性たちが松明を手にしては畑地に出かけ、そこで踊ったり、ふざけた歌をうたったりして、彼らのいう所によると、悪しき播種者を追い出すという(同前、107頁)。改火したり、豊穡を願うためには、男性は女装する必要があったようである。トラキアの古都ヴィザの周辺の村々で行なわれたカーニヴァルでは、女装した男性が犁を曳いて村をまわったり、女装した男性が踊ったりした(フレイザー『穀物と野生獣の魂』第1巻、ロンドン、1912年、27-8頁)。バルト三国のリトワニアでは、収穫時に、女装した道化がトランベツトを吹き、穀霊を演じたという(同前、146頁)。近代のヨーロッパでは、最後の穀物の束を刈るものは、男なら女装し、女なら男装した。最後の束には穀霊が追い込まれて入っていると信じられたが、この穀霊を殺すものは男女とも異性に変身した。これは、非業の死を遂げた穀霊を騙して、その怨みを避けるためとまず考えられるが、穀霊が殺されることによって、復活の契機をはらむことになるので、この場合の変身も豊穡と関係のある変身と考えることができそうである。イランでは、新年1か月前の予祝では、ルーティーと呼ばれる任侠の徒が女装して踊る。新年は



再生する時点であるが、このようなとき、あるいはその予祝のときに変装が見られるのである（S・A・アンジャヴィー『冬の祭りと習俗と信仰』第1巻、テヘラン、1972年、94頁）。これは中国でも同じで、『北史』巻75柳虺伝によると、毎年正月15日になると、角觥は獣面をつけ、その夜、松明が地を照らし、人は獣面を戴き、男は女服をつけ、俳優も女装して異形を呈したという。正月15日は上元つまり小正月で、正月の再生儀礼が完了する日である。再生直前に角觥技が争われて、古くは一方が殺害されることがあった。このような場合、女装が見られたり、トータム獣の面をつけたりしたのである。

男性の女装、女性の男装は、いずれも両性具有を表現したものであった。つまり、境界における斑<sup>まだら</sup>の表象の一つと考えられる。始原の混沌と見ると、異界との連続性がなくなるので前者の見方をする方がよさそうである。タキトゥス『ゲルマーニア』によると、ナハナルワリー族の間には、古代の信仰にかかる聖林があって、女の装いをした一人の司祭がその祭祀を管理したという（泉井久之助訳、岩波文庫、1979年、206頁）。この聖林では、ローマ風にいうと、カストルとポルクスを祭っていたが、この兄弟神と女装の司祭は何らかの関係があったかも知れない。地蔵はその起源から見ると、ギリシアの境界神であるヘルメスと同類のもので男性神であるが、赤い頭巾と赤いよだれ掛けをつけている。明らかにこれは両性具有を表わす。また、地蔵は子供の守護神であるが、ヘルメスと同様、よだれ掛けをつけた幼い姿で表わされ、他方、頭巾をつけた老爺の姿で表わされる。金関丈夫『考古と古代』（法政大学出版局、1982年）所収の「発掘から推理する」の中で、男であり女である双生の巫女は、女性同様の貝飾りを身につけていたとある。このような巫女が日本でも戦陣の先頭に立っていた。松田治『ローマ神話の発生』によれば、ローマでは少女はウェスタの巫女に選ばれると同時に親子のしがらみから解放されて、大祭司長の監督下に入った。これは、少女が男性化したことも暗示した（32頁）。このような、境界に立つ巫女は、男女混合した形で現れるのが定石であった。巫女のなれのはてである妓女の場合、例えば長安の妓女は姉妹を以て相呼ばず、兄弟を以て目しあった。日本の何吉、何奴、何太郎という日本の男名前をつける習慣もこれと関係があるようである（石田、前掲書、111頁）。日本では、『吾妻鏡』巻19、建暦2年11月14日の条に、遊女らを召したが、みな男装させて俗曲を歌わせたとか、林羅山『徒然草抄野槌』に、出雲巫（みこ）が京に来て、僧衣をきて鉦をうち仏号を唱え、始めは念仏踊りといったのに、その後、男の装束をし刀を横たえて踊った。俗にかぶきと名づけるとある（久下司『化粧』法政大学出版局、1970年、190、201頁）。妓女や役者が境界の人であったのは、しばしば論じられるところであるが、男女の状態がいまだ十分に固まらなと考えられ、他者の嫉視を避けなければならないと考えられたときは、男児は女装し、女児は男装する風習があった。日本でもこのような幼少時代を送った人がある。古い習慣を保持して来たユダヤ人の間では、子供は生後3年、頭を刈らないので姉妹と区別できない。この時期を終わると、男としての宗教訓練を受ける（A・ウンターマン『ユダヤ人』筑摩書房、200頁）。近代ヨーロッパでは、収穫に際して最後の束を刈るものが男なら女装し、女なら男装したが、これも境界

の行事としての両性具有の表象であった。ここでは、穀霊を殺すことになるが、宴会などで、女性に変身して客を殺す例をいくつかあげたが、そのような例として見ることもできる。『南總里見八犬伝』の犬塚信乃や犬坂毛野らは女装した剣士として知られるが、それぞれ、名刀村雨丸と落葉・小笹を手に入れ物語の始めと終わりに出る。おそらく、馬琴の意識には何らかの伝統的な変装の構造の図式があったと考えられる。

(1990. 5. 8 受理)